The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み 「べてるの家」訪問研修報告〉べてるの家における家族支援の在り方
Author(s)	杉本, 光衣
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 162-164
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

べてるの家における家族支援の在り方

杉本　光衣

2014 年 9 月 10 日･11 日の二日間、北海道浦河の社団法人　べてるの家 (以下べてる) を訪問し、べてるにおける家族支援のあり方について調査した。本当に短い期間であったので、本質的な理解には程遠いことを重々承知の上で、べてるにおける家族の捉えられ方などについて直感的に感じたことを記述したい。これらすべての記述の中で前提となっているのは、私自身の経験に基づく「精神障害者の家族のこと、またその立場から考えられること」である。

私がどうして家族支援の問題をべてるで問うてみようかと思ったのかというと、べてる関連の資料の中には家族支援の話が少ないと感じたことがきっかけである。本人への支援を考える際に、周囲の人への支援が同時に考えられるのは全く違和感のないことであるのだが､べてるの家においてはそれが「仲間同士の支援」という形で体現されているものの、「家族への支援」という形では現れていないような気がした。精神障がい者の自助コミュニティとしてべてるをとらえたとき、これがどういう意味を持つのかについて問うてみたいと考えた。

とはいうものの、べてるの家における家族支援は全くないわけではないので、どのような支援があるのかを簡単に整理してみたいと思う。

①当事者同士の子どもへの支援→当事者同士が結婚したときの子育て支援

②浦河に元から住んでいた家族たちの家族会→いわゆる家族会

③全国各地における当事者支援→べてるに来られない人に対する支援

私が聞いた限りでは上記の３つである。

ここで抜け落ちているのは、「元々は浦河に住んでおらず、家族と離れて浦河に来た人たちの家族に対する支援」である。そして、これらの層に対するアプローチはあまり考えられていないようだった。

その理由はいくつか推測できると考えられるのだが、その大前提として、そもそもべてるの人たちは家族についてどう思っているのかについて考える必要がある。

べてるに来ている人たちは、そもそも発症の地に良い思い出を持っていない。家族を含めた、あらゆる人たちとの断絶を繰り返して、いわば孤独感を抱えてべてるに来ている。このべてるに来た心情のままでは、勿論家族は“悪”だろう。自分を理解してくれなかった、自分を排除した存在であるはずだ。私が直接話を聞いた何人かの人も「家族とは会っていない」「家族はクズだった」といった発言をした。家族とは当事者を苦しめてきたものらしい。本当に近い人だからこそ、感情がこじれてそういう考えに至ること自体は理解できる。

べてるで当事者たちは「人間らしさを取り戻す」、つまり人と人とのかかわりを取り返そうとする。このとき、まず新しい人間関係の中でかかわりを取り戻そうとする、そのこと自体は一向に問題ではない。しかし、通常はその後に今まで築き損ねた人間関係、すなわち発症の地に残して来た家族や友人といった人々との人間関係に再びアプローチすることを前提として新しい人間関係を構築するのだろうが、べてるはこの前提がないところが他とは違ったコミュニティであると思われる。

べてるに関わる人、運営する人は良くも悪くも当事者が中心となっているので、この深い溝を埋めようとする考えはあまりないのかもしれない (あるいは昔失敗したなどの経験があるのかもしれないが、それに関しては今回知ることができなかった)。

ただ、「苦労を取り戻す」という標語の中には「家族」というものは含まれていないのだろうかということがとても気にかかった。これは本当に苦労を取り戻したことになるのだろうか。

べてるの家族支援は今後どのような方向に向かうだろうか。そもそもべてるという特殊なコミュニティを考えるときに、「家族支援」の必要性はないという人もいるだろう。それもまた一理あることではある。べてるの共同生活のあり方は、それ自体がもはや新しい家族の形態を示唆しているのかもしれない。従来的な血のつながりを条件とした集団形成の方法ではなく、精神障害という共通の苦労を条件とする集団である。

ただこのような自覚がべてるの方々にあるのではないのならば、地元に残してきた家族との仲を取り戻す支援方法を考えてみるのは悪くないことであるように思える。というのも、家族にとって最もつらい出来事のひとつが「私にとって愛する家族が私の理解不可能な人になってしまった」ということだからである。精神障害に関する知識があまり一般的でない現代社会において、家族が精神障害者になってしまったのだ、という事実は深い混乱に家族を突き落とす (あるいは診断名がまだついていないために余計に混乱が生じたこ

ともある)。だから、家族にこそ当事者研究が必要なのだ。本人がどのように思っているのか、どうしたら爆発してしまうのか、そういったことを知ることができれば、家族にとっての悲しみは和らぎ、当事者との仲にも何かしらの改善が見られるかもしれない。

家族が発症要因だということも十分に考えられることであるし、一口に議論することはできないのだが、家族にもまた当事者と同じくらいの悲しみがあるのであるから、どうにか家族との苦労を取り戻すことを頭の片隅に置いてもらえたらと思う。

精神障害者家族である私がべてるに行って感じたことを率直に述べて終わりにさせていただく。べてるは私にとってカルチャーショックだったように感じる。べてるではすべての人が明るくとても楽しそうだった。私が知っている精神障害者の方たちは皆一様に暗い顔をしているものだった。べてるの人たちの姿を見ることは、家族にとって良い意味でも悪い意味でも強烈な何かを残すのではないか。「精神障害の人でもこんなに明るく生活できるのか」という安心感や、「じゃあどうして自分の家族はああなのだろう」という苦痛、そして「こういう環境を私は準備してあげられない」という悔しさのようなもの、など、家族の数ほど感じることはあるではないか。

それらが何であれ、一つ言えるのは「精神障害の人でも楽しく生活できる」という確信を得られるということである。支援の仕方一つで状況は変わるのだ、ということは家族にとって大きな希望となるはずである。